

久代同 曩時同 往代又作 昔年又作

〔倭訓栞前編十三〕そのかみ 昔時をよめり、禁河書に久代をよめり、石上りの義上世といふが如し、

當時をよめるも、上に昔の事をいひて、其時と指の詞なりといへり、もと石上りふるてふ詞より、ふるき事はいひならはせり、

〔空穂物語後隆〕そのかみとしかげこのまら木ごとを、この人々に一づ、たてまつる、

〔源氏物語橋姫四十五〕そのかみむつまじう思ひ給へし、おなじ程の人おはくうせ侍にける世の末に、

略○下

〔大和物語上〕土佐守にありけるさかゐのひとざねといひける人、やまひしてよはくなりて、とばなりける家にゆくとてよみける、

行人はそのかみこんといふものを心ぼそしやけふの別れは

〔冠注大和物語上〕そのかみ略○中 上の語をうけて、その時といへるやうの意也、行ききをもい

ふといへる説はよろしからず、

〔増補雅言集覽曾二十三〕廣足云、こ、は上の語は地の詞、そのかみは病者の歌にて、常いふとは異

也、其時といふ意にて、こ、は行ききをさす也、

〔倭訓栞中編八〕こしかた。來しかたの義也、きしかたも同じ、

〔源氏物語總角四十七〕たつつくくと聞給て

きしかたを思ひ出るもはかなきを行末かけてなにしたのむらん、とほのかにの給、

〔新古今和歌集雜十〕題えらす

こしかたをさながら夢になしつればさむるうつ、のなきぞ悲しき、

權中納言資實

〔日本釋名上時節前比〕さきの比也、つはやすめ字也、